

文章の衰退

原子朗

たばこをやめようと思いがら、なかなかやめない。だからライターも使う。

私はカルチェのライターをもっている。いくらで買ったか忘れたが、日本では高価なものらしい。むかしフランスで買ったのだが、十年以上使ってくるわなるところをみると、ものもいいのであろう。もっとも書斎で使うだけなのだが。

ほとんど持ち歩かないのは、小さいくせに、やけに重いからである。服のポケットがたるんでしまいそうな、ずしりとした重さである。そういえば、ここ十年くらい、男の洋服も和服なみに材質・仕立て、ともにやわらかくなっていて、つまりハードからソフトになって、ポケットに重いものを入れると肩がこりそうな気がする。和服のたもとに文鎮を入れたみたいになる。もうカルチェなんてむかしの趣味で、今は百円ライターの時代なのだろう。

「軽・薄・短・小」の時代なのだそうである。反対に「重・厚・長・大」はきらわれ、と物知りはいふ。なるほど、そうかもしれない。ライターや洋服にかぎらない、人間の愛情もそうらしい。さりとて会ってさりと別れる友情、ゆらゆらと燃えて、間もなく飽きて、さめてしまう異性愛、要するに疲れないのがいいんです、重苦しいのはいや、と、これは二十代の青年たちの述懐である。世にいう離婚率の上昇もそのせいなのだろうか。手軽で気軽、おまけに尻軽、といったあんばいなのだろうか。

高村光太郎が売れなくなった、と本屋がいう。たとえば『智恵子抄』。あれはかつてベストセラーだった。しかも、ずっとロングセラーだった。若い女性に圧倒的な人気があった。今はそうではなくなった。ここ十年あまりの現象だろうか。出版社で詩人のシリーズから高村光太郎をはずすとこ

ろが出てきた。それが風潮のようだ。

たしかに、見てみると、光太郎を卒論や修論にする学生が、私のまわりにもめっきり少なくなった。全国的な傾向のようだ。かわりに宮沢賢治がふえた。私への届け出だけでも来年賢治をやるものが八名。八対0。むかしは光太郎も少なくなかった。五対五ほどの割合だった。

賢治のことは本質的に軽い。軽快である。かといって賢治の文字が軽いわけではないのだが。むしろ重いのだが。その反面の軽さ、軽快さに、本人たちは無意識裡にせよ、まず魅きつけられているふしがあるようだ。深入りしてみても矛盾する重さにしたいに気づいてゆく、ということが指摘できそうだ。

逆に光太郎のことは重い。重厚。ここていう重さや軽さとは、力学でいう荷重(Load)の意味で、むろん相对比较してのことだが、『智恵子抄』といえども重い。その重厚な表現が、まず今の若者たちに敬遠されるのではないか。そればかりか一人の異性への絶対唯一の、ほとんど信仰的な愛が、「軽薄短小」好みの感性には、皮膚感

覚には重苦しく、疲れを覚えさせてしま
うのではないか。そうした愛情は古風な事大
主義に思えるのではあるまいか。重厚長大
の愛よりも、フィリングの愛を、深遠な
情念よりも、スリムな一時の「かわいらし
さ」を愛玩する時代なのだから。

同情していうと、中世以降の重厚な宗教
の尊厳やモラルは今こそ飽きられて、森や
町の広場で角笛など吹きながら、若者たち
が歌い、踊りたわむれ、今日の相手をえら
んで散っていった古代への先祖がえりを、
現代はしているのかもしれない。

若者とはかぎらない、現代人の愛好し、
したがってよく売れる書物の文章の、個人
差をこえた軽さ、まさに軽薄さは、ちょっ
と気のきいた、目先のかわった題材や目の
つけどころにふさわしいことで一致し、共
通する。それがまるでベストセラーならべ
ストセラーの条件でもあるかのように。
あるていど以上深入りしていかない、手前
の軽快さ、だから肩など凝らない。さらっ
と読める手軽さ。その意味では均質、おし
ゃべり、陰にこもらず、含蓄などもない。
それを文章の衰退、というのも古風かもし

れない。変質なのかもしれない。変質があ
たりまえになってきている。若者たちの話
しかたやことばも、ギャグや駄じゃれ、語
呂あわせが多く、笑わせて深入りは禁物。
それがかっこいいし、ナウい、イマイ!

「七たび生まれ変わって文章道に報ぜん」は
尾崎紅葉の言とされている。「七生報国」
のすりかえなのと、あまりに古風ゆえに、
かえって今の若者たちに人気が出るかもし
れない。古風ないまわしも彼らの好むと
ころで、軽くマンガチックにしてしまう。

「男損女肥」「一家断乱」「生みの親より
おだての親」なども彼らの発明だが、「い
つまでもあると思うな親のスネ、障子を張
って自活をしよう」と大書した立て看板の
下で、貧相な学生が「障子張りサークル」
の会員募集をしていた。ある大学での秋景
だが、親のスネが障子の骨に思えて哀愁が
ただよい、私は微笑を禁じえなかつた。

「文章を推敲し、彫琢する」というときの
「推敲」が、詩句に苦行していた賈島くわこうの故
事に発することは有名だが、アリストテレ
スの「詩学」いろいろ、西洋でも表現の苦心
を説く伝統は根ぶかい。技巧上の苦心とは

かぎらない。精神と言語との深い一致に古
今東西の文章家たちは苦心してきた。日本
の作家たちも、つい昨日亡くなった里見弴
あたりまでは、文章のてにをは一つに数日
も苦心するのがふつうだった。文章におけ
る省略や含蓄の美を尊重したのは、しかし
何も日本の美意識だけではない。「芸術
家は彼の省略するものによって著名な人と
なる」といったのはツラーだが、ウォータ
ー・ペーターも含蓄による「構成的知性」
を、アランは文章の抑制によってすぐれた
文体が生まれることを強調している。かつ
て、バルザックはすさまじい推敲で印刷屋
を泣かせた。

芸術的彫琢の文章から情報的軽薄の文章
へ。——そうした衰退なり変質を、しかし
前者によって白眼視、ないし蔑視してはな
らない、というのが私の考えであり立場で
ある。物わかりのよさからでなく、からか
ったり、時には同調したりしながらも、ひ
そかに重大に受けとめること、そのことで
表現の歴史を考えなおし、おおげさにいえ
ば未来を展望したい、それが私の役目だと
思っている。(一・二二・一九八三)